

護持山朝光院天性寺所藏『天性寺聖地藏尊縁起』の成立過程

——地藏菩薩の利生譚から岸和田城史譚へ

辻 陽 史

一 はじめに

護持山朝光院天性寺は、浄土宗・知恩院の末寺である。「増上寺史料集」第五卷所収『浄土宗寺院史』泉州寺院開山帳 岸和田組」には「天性寺」に関して、寛永二（一六二五）年に、得替上人が建立し、以後、寛文十三（一六七三）年までの四八年間、その住職をつとめたことが伝えられている。

小稿で取り上げる『天性寺聖地藏尊縁起』（以下、「蛸地藏縁起絵巻」と略称する）は、この天性寺に現在も所蔵されている縁起絵巻であり、天性寺に秘仏として安置される地藏菩薩（蛸地藏）と通称されている）の利益を語る、十四図におよぶ絵を有する、墨付き十三紙からなる卷子本である。縁起絵巻の制作年次は明記されておらず、わずかに、縁起本文の末尾に「地藏

尊縁起今茲因裝潢修飾記蓋為開扉也 護持山十八世安政四年三月上流 慈普仁達」とあることから、安政四年（一八五七）年三月に改装されていることを知るのみであるが、小稿筆者は、縁起本文の書風や絵から、江戸時代後期に作成されたであろうことを推測する。なお、すでに縁起本文の翻刻と、十四図の影印、ならびに書誌事項については拙稿「護持山朝光院天性寺所蔵『天性寺聖地藏尊縁起』および『天性寺地藏菩薩縁起』五種紹介」に掲載している。拙稿に示すように、「蛸地藏縁起絵巻」のほかにも、天性寺の地藏菩薩の利生譚を記録した文献が伝存するわけである。よって、小稿では、天性寺の地藏菩薩の利生譚（以下、「蛸地藏縁起」と略称する）と「蛸地藏縁起絵巻」縁起本文との異同を検討することによって、「蛸地藏縁起」の成立過程を明らかにし、「蛸地藏縁起絵巻」の縁起本文の成立、さら

には、その制作年代ならびに制作意図などを考察することにし
たい。

二 「蛸地蔵縁起絵巻」に描かれた地蔵菩薩と岸和田城史

「蛸地蔵縁起絵巻」には、地蔵菩薩が岸和田城下を守護するべ
く誓願をたてたことが三度にわたって記されており、また、そ
の利生譚、夢告による出現など、古代から寛永年間にわたった
地蔵菩薩の利生譚を記した縁起絵巻として作成されている。そ
こでまず、「蛸地蔵縁起絵巻」の縁起本文に描かれた地蔵菩薩
を、時系列に従いながら紹介することにした。なお、絵が挿
入されている場合は、その旨を括弧書きで示した。また、第三
章以降で示す、丸囲み数字は次の小見出しの数字と対応する。

① 古代

天性寺の地蔵菩薩は、岸和田の地主神である。岸和田城は、
その地蔵菩薩を祀る寺院跡に築城された。(絵一図あり)

② ある時

朝敵が岸和田城内に押し入り、地蔵菩薩を海中に投げ捨て
た。

③ 建武年中、楠正成の甥・和田和泉守在城の時

暴風が起こり、岸和田城内にまで津波が押し寄せてきた。
そこに、突如、蛸に乗った地蔵菩薩が現れ、波風を鎮めた。
(絵二図あり)

岸和田城主はこの地蔵菩薩を信仰し、新たに城内に御堂を
建立し、地蔵菩薩を安置した。

④ その後、戦乱の世の中

岸和田城主は地蔵菩薩を保護するために、岸和田城の堀へ
地蔵菩薩を沈めた。

⑤ 天正年中、松浦肥前守が城主の時

紀州・根来雑賀の戦が起こった。一人の法師と数千の蛸が
現れ、鉄砲弾を受けながらも、根来雑賀衆を破った。(絵一図
あり)

松浦肥前守は、地蔵菩薩から夢告を受ける。松浦肥前守に、
地蔵菩薩が古来より岸和田を守護しており、根来・雑賀の戦
では、大鬼王を遣わし、城主を救った、と地蔵菩薩は述べた。
(絵一図あり)

夢告の後、岸和田城の堀から光を差しているという評判が
たった。(絵一図あり)

松浦肥前守は、家臣に堀をさらわせると、堀から地蔵菩薩

が現れた。城主は別殿を造り、地藏菩薩を安置し、十七日間、人々の参詣を許可した。(絵二図あり)

⑥ 文禄年中、城主(松浦肥前守) 国替の時、

岸和田城主(松浦肥前守)は地藏菩薩を伴い国替をしようと考えた。しかし、地藏菩薩は夢告によって岸和田に留まる意志を伝える。地藏菩薩は松浦肥前守に自らの代わりに錫杖を授け、松浦肥前守は、その錫杖を代々の家宝とした。(絵一図あり)

⑦ 小出播磨守が城主の時

地藏菩薩は白法師に変化し、往来の人々を驚かし、民衆を困らせた。小出播磨守は「岸和田城下の人々が地藏菩薩を信仰するようにせよ」という、地藏菩薩からの大悲の方便であると判断し、地藏菩薩を岸和田城外へ移すことを考えた。その時、天性寺の得替上人が、天性寺に地藏菩薩を迎え入れることを願い出た。(絵一図あり)

⑧ 天性寺に地藏菩薩を安置した後

地藏菩薩は長年を経て傷んでおり、京都に送り、修復することになった。

その夜、侍・長谷川勘左衛門が、地藏菩薩からの夢告を受けた。地藏菩薩は、京都へ行かず、岸和田に仏師を呼び、尊

体を修復するよう告げた。(絵二図あり)

長谷川氏は得替上人にこのことを告げると、得替上人は、仏師を京都から呼び、地藏菩薩の修復を行うと、地藏菩薩の胎内から鉄砲の玉がいくつも出、昔の戦に地藏菩薩が参戦したことは本当であったと人々は信仰を厚くした。地藏菩薩が参戦したことを後世の人々が疑わないために、鉄砲の傷跡を一か所だけ修復せず残しておいた。(絵一図あり)

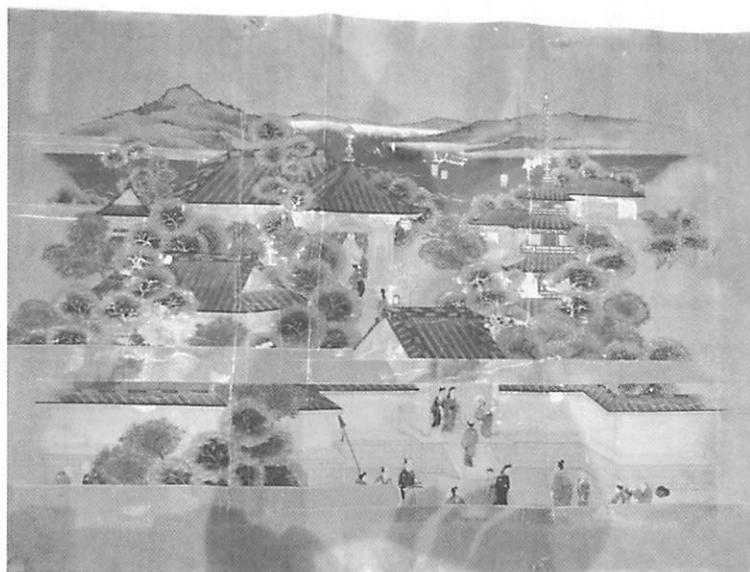
この後、地藏菩薩に対する信仰が盛んになった。(絵一図あり)

以上のように、この「蛸地藏縁起絵巻」は、地藏菩薩の利生譚とともに、岸和田城と岸和田城下の歴史ともいべき記述をもつて記されている。絵画十四図のうち、六図に岸和田城が描かれていることにも、この縁起絵巻に岸和田城を描く必然性があつたといえる。しかし、岸和田城史に照らし合わせると、「蛸地藏縁起絵巻」本文には岸和田城の位置と岸和田城主の二点に関して異同があることがうかがえる。

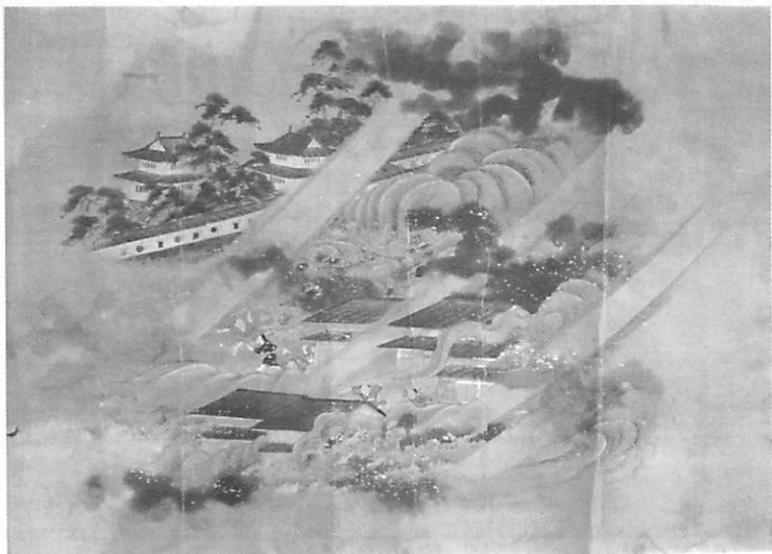
三 岸和田城の位置

まず、岸和田城の位置について考察する。①古代では寺院跡に岸和田城が築城されたことが記されているが、その寺院は、図一に示すように絵においても海のそばに描かれている。さらに、③建武年中に岸和田城が津波の被害にあったこと、蛸に乗った地藏菩薩が海に出現したことによって津波が鎮まったこと、および、それぞれを示す絵（図二、図三）は、岸和田城が、現在も海側に残る岸和田城（以下、近世岸和田城と称する）跡に位置していたことを示している。

しかし、古代の岸和田城（以下、岸和田古城と称する）は、文政九（一八二六）年に岸和田藩士・浅野秀肥が作成した、大阪歴史博物館蔵「岸和田古城図」（図四）が示すように山城であった。平成十八年度、平成十九年度に岸和田市教育委員会が、岸和田古城の発掘調査を行い、岸和田古城が、岸和田城跡よりも南東に五〇メートル山側に位置していたことが明らかとなった。また、この調査により、「岸和田古城図」が当時の古城の様子をほぼ忠実に伝えるものとしても注目されている。同教育委員会の埋蔵文化財調査技師である山岡邦章氏は、「発掘調査からみた中世後期の岸和田―岸和田古城跡の発掘調査―」^②の中



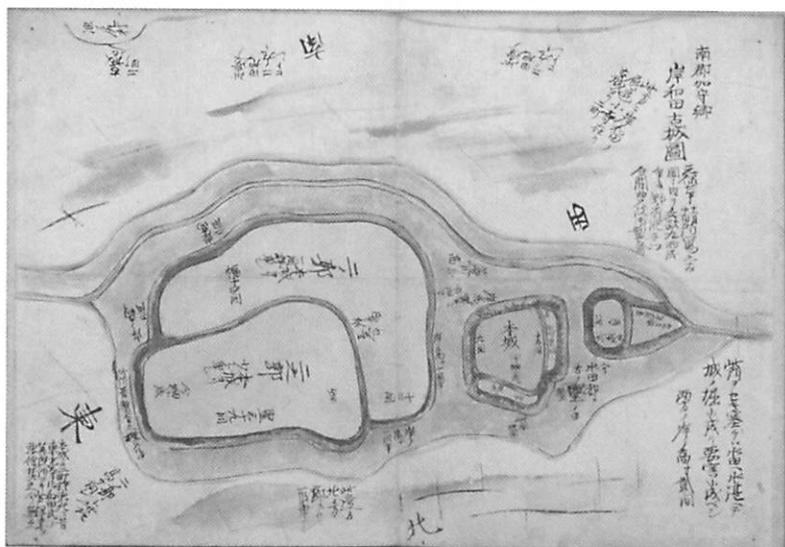
図一



图二



图三



図四

で、岸和田古城は「十五世紀後半に築造され十六世紀初頭頃には廃絶していたことは明らかとなった。」としている。中西裕樹氏は、「城郭史からみた岸和田古城と戦国期・岸和田城」³⁾の中で、その後、十六世紀半ば以降には、松浦氏が本拠地とした、戦国期岸和田城が築城され、その所在地は、近世岸和田城の地に比定するのが妥当であるとしている。そして、山中吾郎氏が「戦国期和泉の地域権力と岸和田城」⁴⁾で、天正十二(一五八四)年までに、岸和田城に天守閣の存在があったことが、「中村一氏感状」から窺えることから、近世岸和田城は天正十二年までに存在していたと言及している。

以上のことから、「蛸地藏縁起絵巻」制作者は、建武年中の津波の場面において、戦国期・近世岸和田城と同じ位置に、岸和田古城をイメージしていたことになり、岸和田古城の存在を知らなかったということになる。

四 岸和田城城主

表一「城主名・本文異同一覧」は、歴史的事実と「蛸地藏縁起絵巻」ならび、第五章で示す「地藏菩薩利益集」、「泉州志」、「和泉名所図会」所収の「蛸地藏縁起」の本文異同を一覧で示し

たものである。(表一)に挙げるように、「蛸地蔵縁起絵巻」は、出来事と城主名との関係が歴史的事実と異なっている。

まず、③建武年中において、「楠判官正成此国を領す時に、甥の和田和泉守」を城主としているが、これについては、現在の研究においても定かではない。『群書系図部集』巻六三所収「橘氏系圖」⁵⁾によれば、楠正成の甥にあたる人物は、弟・正氏の子で、行忠、高家、賢快、賢秀の四人である。元禄十三(一七〇〇)年に刊行された石橋直之著「泉州誌」、ならびに寛政八(一七九六)年刊「和泉名所図会」(秋里離島編、竹原春朝齋画)の二つの地誌は、岸和田古城の初代城主を高家としている。

・「泉州志」「岸和田城」(傍線は筆者加筆。)

余曾聞和田氏之家系、此地本岸村也、和田新兵衛尉高家、始構城郭、住于此、称之岸和田、後覚名也、高家之男正武、同住于此、父系記大鳥郡和田村條下

太平記評判云、正慶二年、楠正成賜攝河泉三國、正成即和田新三郎為和泉守、配與當國余按、此時始築此城歟、新三郎、當新兵衛之童名

・「和泉名所図会」「岸和田城」(傍線は筆者加筆。)

岸和田城 楠正成の支族和田新三郎高家初て城郭を構ふことれより岸和田と云ふ原は岸村なり、正慶二年楠正成に摂河泉三州を賜ふ、其時和田新三郎高家に當國を与へて和泉守と号す

高家は和田新發意源秀の兄なり、其後永禄年中に三好の家族籠城し天正には中村氏此城を守り、元和元年には小出大和守、此城に在て戦功あり。今城下の町筋は、南海道の駅路也。當郡都会の地にして交易の売人多し。町名は北町魚屋町堺町本町南町といふ、其外裏町ありて繁昌の市中也

しかし、山中吾朗氏⁶⁾によれば、これまで、南北朝時代の初めに楠正成の代官として岸和田に來た楠一族の和田高家が岸和田古城を築いたとされてきたが、これは「泉州志」を發端としている説であるという。

この「泉州志」が根拠とする「太平記評判秘伝理尽鈔」(以下、「太平記評判」と略称する)には、「正慶二年、楠正成に摂河泉三國を賜ふ、正成即ち和田新三郎を和泉守とし當國に配与」、「和田新兵衛尉高家、泉州に帰りて岸和田城に籠居す」との記述があり、石橋直之が「太平記評判」に依拠して、「岸和田城」の記述を作成したことは明らかであるが、山中氏は、「岸和

「利益集」

「泉州志」

「和泉名所図会」

城主名 (受領名)	時代	城主名 (受領名)	時代	城主名 (受領名)	時代
出来事		出来事		出来事	
楠正成の舍弟・和泉和泉守	建武年間	—	建武年間	—	建武年間
<ul style="list-style-type: none"> ・蛸に乗った地藏菩薩が海浜に出現。 ・戦乱で、人々は地藏菩薩を信仰せず、地藏菩薩を堀に捨てる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・蛸に乗った地藏菩薩が海浜に出現。 ・戦乱で、人々は地藏菩薩を信仰せず、地藏菩薩を堀に捨てる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・蛸に乗った地藏菩薩が海浜に出現。 ・戦乱で、人々は地藏菩薩を信仰せず、地藏菩薩を堀に捨てる。 	
小出大和守	—	—	天正年中	松浦氏	天正年中
<ul style="list-style-type: none"> ・堀から金色の光がさす。堀をさらうと地藏菩薩が出現。 ・城主、小堂を作り、地藏菩薩を安置した。 ・紀州根来雑賀の戦が起こり、一人の法師が現れ、数万の敵と戦い、撃破。 ・城主、戦に勝利したのは地藏菩薩の冥加であると、地藏堂に参詣。すると、尊体に多くの矢が刺さり、弾痕も多く残っていた。 ・羽柴秀吉のための戦も終わり、人々安堵する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・紀州根来雑賀の戦が起こり、一人の剣術に優れた法師が現れ、敵を撃破。 ・戦後、城主、堀に蛸が浮いているのを時々目撃。 ・堀をさらうと、木造の地藏菩薩が出現。城主、戦の大法師は、地藏尾の化身であったと気づく。 		<ul style="list-style-type: none"> ・紀州根来雑賀の戦が起こり、一人の剣術に優れた法師が現れ、敵を撃破。 ・戦後、城主、堀に蛸が浮いているのを時々目撃。 ・堀をさらうと、木造の地藏菩薩が出現。城主、戦の大法師は、地藏尾の化身であったと気づく。 ・城主は人々に信仰させ、天性寺の住持・得菩に地藏菩薩を授けた。 	
松平周防守	—	/			
<ul style="list-style-type: none"> ・地藏堂を池尻の堀に移築。 ・年月が経ち、地藏堂・地藏菩薩ともに朽ち、天性寺得菩上人が城主に願い出、天性寺に地藏菩薩を迎え入れる。上京して修理することになる。 ・地藏菩薩が、侍の長谷川勘左衛門に、上京することをやめ、岸和田に仏師を呼ぶよう、夢告する。 ・長谷川氏、得菩に夢告の内容を告げる。得菩、京都から仏師を呼ぶ。 ・尊体を聞くと、鉄砲の玉が出、昔の戦に出現したことは本当であったと、人々は敬礼した。地藏菩薩が戦に出現したことを後世にも伝えるため、弾痕を一か所だけ修復せず。 ・昼日の光が再び輝いたのは得菩上人の功徳と地藏菩薩の冥助である。 					
/					

表一 城主名・本文異同一覧

		歴史的事実		「蛸地藏縁起絵巻」	
		城主(受領名)	在職年月日	城主名(受領名)	時代
		主な出来事		出来事	
古城時代		和田和泉守?	?	楠正成の甥・和田和泉守	建武年間
				(和田和泉守以前、朝敵が「御寇」に侵入し、地藏菩薩を海中に投げ捨てる。) ・暴風波浪発生。 ・蛸に乘った地藏菩薩が波に乗って城内に現れ、暴風鎮める。 ・城主、堂を建立し、地藏菩薩を信仰する。 ・城主、戦乱から地藏菩薩を守るため、堀へ地藏菩薩を沈める。	
戦国期岸和田城		松浦守(肥前守)	元亀4(1573)年1月 ~ ?	松浦肥前守	天正年中・文禄年中
		・元亀4(1573)年1月松浦肥前守入城 ・天正元(1577)年信長、雑賀攻めのため、香庄に陣取る。佐野・信達を経て、雑賀を攻める。 同3月、雑賀衆、信長に降伏。 ・天正10(1582)年6月本能寺の変で、信長自害。		(天正年中) ・紀州根来雑賀の戦の際、一人の法師と数千の蛸が現れ、根来雑賀勢を撃破。 ・城主、地藏菩薩から、岸和田守護のために根来雑賀の戦に大鬼王を遣わした、との夢告を受ける。	
近世岸和田城		中村一氏	天正11(1583)年 ~ 天正13(1585)年5月		
		・天正11(1583)年4月、秀吉から岸和田城在城を命じられる。以降、岸和田勢と紀州勢との合戦がたびたびおこる。 ・天正12(1584)年3月、根来・雑賀衆、大阪城を攻めるため、泉州へ進攻。岸和田城勢と合戦し、根来・雑賀衆退却(岸和田合戦) ・同年4月、小牧長久手の戦。 ・天正13(1585)年3月、秀吉、紀州攻めのため、岸和田城へ入る。根来寺出城焼き討ち、根来寺焼き討ち		・堀から光がはなれた、堀をさらうと地藏菩薩が現れ、17日間、民衆に参拝を許可。(文禄年中) ・城主、国替の時、地藏菩薩とともに国替を試みる。 ・地藏菩薩が岸和田にとどまりたい、と城主に夢告し、代わりに鉤杖を城主に授与する。	
		小出秀政(播磨守)	天正13(1585)年7月 ~ 慶長9(1607)年3月	小出播磨守	—
		・天正13(1585)年7月、小出秀政、秀吉より岸和田・貝塚に四千石の知行を与えられ、城主となる。 ・天正15(1587)年9月、小出秀政の嫡男・吉政、秀吉より加守・土生・五ヶ庄に六千石の知行を与えられる。この頃、岸和田城の整備始まる ・文禄4(1595)年、岸和田城天守閣の築造始まる。慶長2(1597)年、天守閣竣工。 ・慶長3(1598)年秀吉没。 ・慶長7(1602)年9月関ヶ原の戦。 ・慶長8(1603)年2月、徳川家康、征夷大将軍となり、江戸幕府を開く。		・地藏菩薩が白法師と変化し、往来の人々を怖がらせていた。城主、これを地藏菩薩の大患の方便と考え、地藏菩薩を場外へ移す。 ・天性寺住職・得誓上人が城主に願い出て、地藏菩薩を天性寺に受け入れる。地藏菩薩は傷んでいることから、上京して修理することになる。 ・地藏菩薩が、侍の長谷川勘左衛門に、上京することをやめ、岸和田に仏師を呼ぼう、夢告する。 ・長谷川氏、得誓に夢告の内容を告げる。得誓、京都から仏師を呼ぶ。 ・尊像を聞くと、鉄砲の玉が出、昔の戦に出現したことは本当であったと、人々は敬礼した。地藏菩薩が戦に出現したことを後世にも伝えるため、弾痕を一か所だけ修復せず。 ・以後、結核ますます盛んになる。	
	小出吉政(大和守)	慶長9(1607)年3月 ~ 慶長18(1616)年2月			
	・慶長9(1607)年3月秀政没。吉政、跡を継ぎ、城主となる。 ・慶長10(1605)年4月家康、將軍職を辞す。秀忠、2代將軍となる。				
	小出吉英(大和守・右京大夫)	慶長18(1613)年3月 ~ 元和5(1619)年8月			
	・慶長18(1613)年3月吉政没。嫡男・吉英、跡を継ぎ、城主となる。 ・慶長19(1614)年10月大坂冬の陣。吉英は徳川方に加わり、岸和田城は松平信吉(のちの北条氏重)が留守居として入る。 ・元和元(1615)年4月、大坂夏の陣。豊臣方の大野治胤軍、和泉に進駐。岸和田城を包圍する。 泉南・櫻井川周辺で大野軍と徳川方の浅野長晟軍が合戦。 ・同年5月大阪城落城。豊臣秀頼・淀殿自害し、豊臣氏滅亡。				
	松平康重(周防守)	元和5(1619)年8月 ~ 寛永17(1640)年6月			
	・元和5(1619)年8月吉英、出石へ移り、松平(松井)康重、岸和田藩主となる。				

※史実については「岸和田藩の歴史」、「岸和田城と岡部家」による。

田市史 第二卷」所収「建武新世紀の岸和田」⁷⁾において、「現段階では一次史料による裏付けを得られない以上、その記事を無批判に信賴することは危険であろう。南北朝期の同時代史料で和田高家と岸和田との關係を示す資料は残念ながら見当たらず、さらに岸和田城の存在を示す史料も見つかっていない。」と考究しており、現在のところ「泉州志」は「太平記評判」に依拠して誤記したと判断されている。

次に、⑤根来・雑賀衆との合戦の場面では、「天正年中」の「松浦肥前守」の頃としているが、現在の研究では、天正十二(一五八四)年根来・雑賀の戦において岸和田城を守り抜いた城主は、中村一氏とされている。⁸⁾

ここで、根来・雑賀衆の合戦と岸和田城との關係に触れておきたい。

岸和田城は、十六世紀前期から中期頃、室町幕府と紀州の畠山氏・根来寺・雑賀一揆などの勢力との対立・抗争の中で、紀州勢力を押さえる軍事的拠点として築かれた。織田信長は、畿内の覇権を確立するため、雑賀衆との十年に及ぶ戦いに突入した。また、紀州の根来寺は、室町から戦国時代には大阪・泉南地方に勢力を伸ばし、和泉国守護ともしばしば抗争を繰り返してきた。天正十(一五八二)年、信長自害の後、羽柴秀吉は天

正十一(一五八三)年に家臣である中村一氏を岸和田城主に任命し、翌年には徳川家康との小牧・長久手の戦いに出陣する。しかし、秀吉の留守中に大坂を襲うため、根来衆が泉州に出陣する。根来の大軍を迎えた中村一氏は岸和田城を守り抜き、天正十三(一五八五)年、秀吉は根来寺を討伐するため、岸和田城を足掛かりとして、紀州へ攻め入り、紀州を平定する。その後、秀吉の叔父・小出英政が入城し、慶長一九年、元和元(一六一五)年の大坂の陣では、小出氏は豊臣一族の大名であったが、徳川方につき、戦後も三代目吉英が在城する。しかし、元和五(一六一九)年、小出氏は但馬に移され、かわりに徳川一門の大名である、松平康重が入城し、岸和田城は豊臣政權から徳川政權に代わっていった。

このことをふまえ、⑤の場面において、城主名が史実と異なることは、岸和田市立郷土資料館編『戦乱の中の岸和田城―石山合戦から大坂の陣まで―』⁹⁾、同編『岸和田城と岡部家』¹⁰⁾にも指摘がある。

最後に、⑦の地藏菩薩を天性寺に安置する場面において、城主は小出播磨守となっているが、得替上人の天性寺建立を寛永二(一六二五)年とするならば、城主は、松平周防守となる。

以上、「蛸地藏縁起絵巻」と史実との關係を見たが、この史実

との異同には政治的な意図があることがうかがえる。そのことを裏付けるために、次に「蛸地蔵縁起絵巻」以外の「蛸地蔵縁起」を紹介し、次に「蛸地蔵縁起絵巻」と他の「蛸地蔵縁起」との本文比較を行いたい。

五 「蛸地蔵縁起絵巻」以外の「蛸地蔵縁起」六種

管見の限りでは、「蛸地蔵縁起絵巻」以外の「蛸地蔵縁起」は次の六種である。

- (1) 元禄四（一六九二）年刊「地藏菩薩利益集」（大谷大学蔵 本、浄慧編、全五巻）所収「岸の和田天性寺地藏菩薩尊靈験の事」
- (2) 元禄十（一六九七）年刊「延命地藏菩薩經直談鈔」（必夢編）所収「泉州岸和田天性寺地藏靈験」
- (3) 元禄十三（一七〇〇）年刊「泉州志」（石橋直之著）所収「天性寺地藏」
- (4) 寛政八（一七九六）年刊「和泉名所図会」（秋里雛島編、竹原春朝齋画）所収「蛸地藏」
- (5) 「泉州史料」（寺田兵治郎編・全三五分冊・大正三〜六年、

岸和田実業新聞社出版）所収「縁起」

- (6) 「蛸地蔵尊略縁起」（岸和田市立図書館蔵、出版年次など記載なし。裏表紙に「泉州岸和田 蛸地蔵天性寺」とあるのみ）

(1) 「地藏菩薩利益集」については、渡浩一氏は「地藏菩薩利益集」の世界―貞享・元禄時代の民間地藏信仰―¹²⁾の中で、この「地藏菩薩利益集」が經典を典拠とする靈験譚を採録しておらず、「編者浄慧の見聞録」当時の巷間説話によって構成され、数話の例外を除いて先行典籍からの書承説話を含まないことと注目される」ことを挙げている。渡氏の指摘と、得替上人が天性寺を開山したとする寛永二（一六二五）年から六六年後に刊行されたことをふまえると、この「地藏菩薩利益集」所収の「蛸地蔵縁起」（以下、「利益集」と略称する）は天性寺建立当初に作成されていた地藏利益譚であった可能性が高いと考えらる。

(2) 「延命地藏菩薩經直談鈔」は「地藏菩薩利益集」の六年後に刊行されたものである。「延命地藏菩薩經直談鈔」所収「蛸地藏縁起」（以下、「直談鈔」と略称する）の本文には「利益集二見ヘタリ」と注記があり、「直談鈔」が「利益集」を参照した

ことは明らかである。

(3) 「泉州志」は、西峰散人の著した序文「和泉国之人石橋直之自壯歲欲察本国之地理奔走廻廻經歷勝地問神社仏閣之權輿探僧俗之伝記自国史百氏達歌人之所吟詠無不涉獵凡得泉州事金屑玉碎無不拾遺積纂述泉州志六卷」によれば、和泉国出身である、俳人・歌人の石橋直之が、和泉国の神社仏閣などを訪れ、その見聞をもとにまとめたものである。

(4) 「和泉名所図会」は、「泉州志」と同じく秋里離島による和泉国各地の伝説や名勝旧跡の解説と、竹原信繁による挿絵を有する地誌である。秋里離島は、江戸時代中期・後期の説本作者であり、安永九(一七八〇)年刊行「都名所図会」以降、画工を連れて諸国を實際に踏査し、多くの「名所図会」を刊行したとされる。

(5) 「泉州史料」は、岸和田を中心とする地誌や文献を活字化したものであるが、典拠が明らかでないものが多い。「泉州史料」所収「縁起」(以下「泉州史料」と略称する)も、典拠・成立年代ともに不明であるが、「蛸地蔵縁起絵巻」の本文を簡略化したものであることから、「蛸地蔵縁起絵巻」に基づいて作成された略縁起であった可能性が高い。

(6) 「蛸地蔵尊略縁起」は、「蛸地蔵縁起絵巻」に基づいて活

字化した絵入り冊子であり、刊記は記されていない。しかし、表装および現・住職である土井信演氏の聞き取りから、先代住職時代に刊行されたものといえる。

六 「蛸地蔵縁起」本文異同の考察

そこで次に、「蛸地蔵縁起絵巻」本文とそれ以外の「蛸地蔵縁起」本文の比較検討を行うことによって、「蛸地蔵縁起絵巻」の形成過程を考察したい。なお、「蛸地蔵縁起」本文の比較検討をするにあたり、「直談鈔」は、「利益集」を参照して制作され、また、内容に異同が見られないことから、本章では、本文比較の対象から外しておく。また、「泉州史料」は「蛸地蔵縁起絵巻」の略縁起であるとみなして、「蛸地蔵縁起絵巻」と内容に異同がみられないため、同様に、本文比較の対象から外すこととする。さらに、「蛸地蔵尊略縁起」も「蛸地蔵縁起絵巻」に基づいて制作されていることから、本文比較の対象から外す。

よって、本章では、「蛸地蔵縁起絵巻」と、「利益集」、「泉州志」所収「天性寺地蔵」(以下、「泉州志」と略称する)、「泉州名所図会」所収「蛸地蔵」(以下、「和泉名所図会」と略称する)の縁起本文を比較検討することとした。

「蛸地蔵縁起絵巻」と、この三種を比較すると、城主の異同を中心、大きく次の三つの場面において異同が確認できる。

- (1) 岸和田城の由緒、ならびに古代の場面(①～③)
- (2) 紀州根来雑賀の戦の場面(⑤)
- (3) 得譽上人が地蔵菩薩を天性寺に安置する場面(⑦)
- (1) 岸和田城の由緒、ならびに古代の場面

「蛸地蔵縁起絵巻」①の岸和田城の由緒、②の朝敵が伽藍に侵入し、地蔵菩薩を海中に投げ捨てる場面は、他の「蛸地蔵縁起」には描かれていない。「利益集」、「泉州志」、「和泉名所図会」では、いずれも「蛸地蔵縁起絵巻」③の、海中から蛸に乗った地蔵菩薩が出現したことを描き、「蛸に乗った地蔵菩薩」ということからこの地蔵菩薩を「蛸地蔵」とするという、由来を伝えるに留まっている。「蛸地蔵縁起絵巻」では、暴風時に海中から蛸に乗った地蔵菩薩が出現し、暴風を鎮めることで、岸和田を地蔵菩薩が救済した利益譚とする構成になっていることがうかがえる。

また、③においては城主の記述も異なっており、「蛸地蔵縁起絵巻」は、「楠判官正成」の「甥の和田和泉守」を城主としている。

るが、「利益集」では「正成の舎弟・和田和泉守正氏」が城主となっており、楠正成と和田和泉守の関係が異なっている。

また、「泉州志」、「和泉名所図会」には、「建武年中」と元号のみを記し、城主には触れていない。しかし、四章であげたように、「泉州志」「岸和田城」ならびに「和泉名所図会」「岸和田城」の項には、「蛸地蔵縁起絵巻」と同様に、正成の甥である、和田和泉守高家を記載していることが確認できる。

【群書系図部集】卷六三所収「橘氏系圖」によれば、楠正成の弟に正氏が確認でき、正氏が和泉守であった可能性は、廣田浩治氏「中世中後期の和泉国大津・府中地域」¹³においても指摘がある。

この古代の場面については、「蛸地蔵縁起絵巻」は、城主の記述において「泉州志」ならびに「和泉名所図会」と共通点がみられる。

(2) 紀州根来・雑賀の戦の場面

⑤根来・雑賀衆との合戦時の場面を、「蛸地蔵縁起絵巻」では、「天正年中」の「松浦肥前守」の頃としているが、「泉州志」には「天正年中」とのみ記し、城主名を明記せず、「和泉名所図

会」には「天正年中、松浦氏」とあることから、合戦の場面に
おいては、「蛸地蔵縁起絵巻」と「和泉名所図会」に共通点を確
認できる。

ただし、現在の研究では、根来・雜賀の戦いにおいて岸和田
城を守り抜いた城主は、中村一氏とされていることは、第四章
で述べたとおりである。

また、「利益集」では、合戦時の城主を「小出大和守」とし
て、これも史実との異なりがみえる。次に本文を引用する。(傍
線は筆者加筆。)

かくて城内にはおもひもよらぬ軍にうちかちぬる事、これ
たゞ事にあらず、いかさまにも地蔵はさつもの冥加あらせ給
ふにこそといふやから多かりければ、城主もさにこそあら
んずらめ、とかくまづかの堂へまいりて、礼謝奉んとて、
軍卒とともにいそぎかの地蔵堂にまうで、尊容を拝し見
給ふに、こはいかに多の矢を射たてられさせ給ふのみなら
ず、銃炮のあと又かすもなし、さてはうたがひもなく、こ
の尊の慈悲加祐し給ひぬるにこそとて、をのゝ感涙をな
がされけり、城主はことに此御ありさまを見て、心肝にそ
みてありがたくおもはれければ、供養恭敬のまことを抽て、
それより当城の鎮主のごとくにあがめたてまつられけると

なん、かくて根来雜賀も、羽柴秀吉公のためにうちおさめ
られて、日ごろの強毅もやみてければ、当国の人民いよゝ
安堵のおもひをなし、ひとへに大士の餘光也とて感喜の心
をかたふけけり、

「小出大和守」が合戦に加勢した地蔵菩薩を信仰することで、
地蔵菩薩自身が岸和田を守護する地蔵菩薩利益譚となっている。
「泉州志」、「和泉名所図会」においても、合戦後、堀をさらうと
地蔵菩薩が出てきたことから、合戦に現れた大法師が地蔵菩薩
であると城主は気づいており、「利益集」と同じく、地蔵菩薩の
利益を語る構成になっている。

「泉州志」(傍線は筆者加筆。)

縁起云、当寺地蔵菩薩者、建武年中、御蛸背現于海浜焉。
時惟乱世人不敬信敬。棄之城外溝洫。天正年中、紀州根来
雜賀逆徒、侵近境、来既欲屠岸和田城。時城中有一大法師。
劔術殆妙手、逆徒為之四敗走焉。法師忽焉不見、人皆為奇
也。軍散後城主時見蛸之浮溝洫、乃怪之、以許多人手摸索
溝洫。不得、偶泥中得地蔵木像、於茲始知先所現大法師者
惟地蔵变身矣。故俗称之蛸地蔵。

「和泉名所図会」(傍線は筆者加筆。)

鮎地蔵 岸和田城下、天性寺にあり。寺記に曰、当寺の地蔵尊は建武年中鮎の背に御玉ひて海浜に出現し玉ふ。其時節逆乱なれば、人敢て信敬せず。これを城外の堀の中へ棄にけり。天正年中、松浦氏、此城に籠られし時、紀州根来雑賀の逆徒、近隣を侵し、既に岸和田の城を陥さんとす。かゝる時に、城中にひとり大法師あり。劔術妙手を震ひ、蝶鳥の如く戦ひければ、逆賊、大い恐れ、四度路になつてぞ敗走す。大法師、敵を追ちらし、忽然として見へず。人みな、奇也とす。軍散じて後、城主、時々、鮎の堀に浮むを見る。これ奇怪也とて、多く人数を以て堀水を探らするに、木像の地蔵尊を得たり。於是、前に現じたる大法師は此地蔵の変身ならんと、初て信敬恭礼ある。なおも、諸人に拝胆させ、仏智の結縁あらしめんとて、当寺の住侶泰山和尚に授与し玉ふ。因茲ここに安置し、世俗これを鮎地蔵と称す。

この点でいえば、「鮎地蔵縁起絵巻」のみ、地蔵菩薩が夢告で次のように述べるのである。

故に此所を守護する事、未だ嘗てやますは、又城主の危きを救ひ大敵を防ぐ、然るに、殺害を厭ふがゆゑに、わが眷属の「大鬼王」を使い、只君に戦功を取らしむる(傍線は筆者加筆)

つまり、合戦において「大鬼王」が参戦したことが明示されるわけである。しかし、⑧天性寺に安置された地蔵菩薩を修復した場面では、その胎内から「鉄砲の玉」が発見されたことによつて、紀州根来・雑賀衆との合戦時に出現したのは、「大鬼王」でなく、地蔵菩薩であつたことが明らかになる。

往昔の軍場に変現し給ふこと、更に妄伝にはあらざりし、とておの／＼舌をふるひ、至誠に敬礼しあへりける、遠近の諸人、この事を聞伝へ、誰す、むるともなくして、結縁雲集しぬ、さて仏工功終りて、後々の諸人の疑問を説明せん爲に、とて鉄砲の痕一ところ修補に及はずして残されたり(傍線は筆者加筆。)

⑧の場面では、地蔵菩薩が合戦時に出現し戦つたと伝承されていたことになり、ここに異同が生じている。この異同は、地蔵

菩薩が参戦することで、殺生なるのではないかという考えに基づいたものと考えられる。

ここで、地蔵菩薩が参戦することが仏教教義において問題視されていない例として、増上寺・安国殿に安置される阿弥陀如来（通称「黒本尊」）の伝承を挙げる。恵心僧都作、徳川家康の念持仏と伝えられる、この阿弥陀如来の利益譚を伝える「護国殿黒本尊略記」には、大坂の陣において、阿弥陀如来が戦っている様子が次のように描かれている。

元和の初大坂御陣の時、本尊を奉持し給ひ、国師の上足廓山・了的に本尊の供奉を仰付らる。

かくて茶臼山の後陣營にて阿僧を召され、しはらく御法話の折から陣前の戦始りて、阿陣勝負の注進しきなみのことくなるに、味方の御陣より黒糸威の鎧着たる法師武者者人、敵陣に駆入て獅子奮迅のいきほひをなし、神変不測の働をなすものあり。誰と見たるもなかりければ奇異の事におほしめし、もしや仏神の加護にもあらんと本尊を拝覧あらせられしに、本尊の全身汗はみ、御背に御疵ありけるにぞ。「さては本尊の御加勢なるものぞ」と深く御感信ありて、いよ／＼利生を仰かせ給ふ。

この場面では、法師に変化した阿弥陀如来が戦っただけでなく、念持仏である阿弥陀如来が背中に鉄砲傷を負っていることに徳川家康が気づき、信仰心を厚くしたことが伝えられている。この展開は、蛸地蔵の利益を伝える「利益集」と同様の展開になっている。なお、曾根原理氏は「増上寺における東照権現信仰」の中で、黒本尊信仰は、「遅くとも十八世紀後半の増上寺において、神仏一致の立場から阿弥陀如来（黒本尊）と東照権現（家康）を結合させた信仰の生み出されていたことが確認できる」と述べている。つまり、戦国期における武将たちの信仰を経て、「地蔵菩薩利益集」成立以前から、神仏が参戦することには問題視されていないことを指摘できるのである。つまり「蛸地蔵縁起絵巻」は、神仏の参戦することを書き換え、避けたことによつて、元禄期成立の「地蔵菩薩利益集」、「泉州志」、「和泉名所図会」よりも後、つまり、地蔵菩薩の参戦が殺生にあたと捉えた時代に、「蛸地蔵縁起絵巻」が制作されていたことを指摘できるのである。

(3) 得替上人が地蔵菩薩を天性寺に安置する場面

最後に、得替上人が地蔵菩薩を天性寺に安置した折の、岸和

田城主をみる。「地蔵菩薩利益集」には「松平周防守」と記されており、得譽上人が天性寺を建立した寛永二（一六二五）年に城主を務めた人物と合致している。

一方、「蛸地蔵縁起絵巻」は、「小出播磨守」とし、「泉州志」は記述せず、また、「和泉名所図会」では「松浦氏」となっている。

以上のように、「蛸地蔵縁起絵巻」に比べて、「利益集」、「泉州志」、「和泉名所図会」にはほとんど史実との相違や、展開に矛盾がなく記されていることが確認できる。また、「蛸地蔵縁起」と「和泉名所図会」との共通性もうかがえる。

ここで、「和泉名所図会」の典拠とする、「寺記」を「蛸地蔵縁起絵巻」と考えると、暴風津波における救済や、夢告の場面の欠如、合戦に参戦したのは地蔵菩薩であることをはじめから明記するなど、異なる点が多い。さらに「和泉名所図会」に「松浦氏」と明記されていることから、この「蛸地蔵縁起絵巻」の制作には「和泉名所図会」が参照されていたことが指摘できる。

七 「蛸地蔵縁起絵巻」の制作意図

「和泉名所図会」を参照して書かれた「蛸地蔵縁起絵巻」は、

「利益集」にみられるような地蔵菩薩利益を語ることを主たる目的とせず、他の目的をもって制作されたことをうかがわせる。

「蛸地蔵縁起絵巻」の制作意図を明らかにするために、次に「蛸地蔵」の通称にみられる「蛸」に注目したい。

「利益集」の合戦の場面においては、「蛸」は登場せず、地蔵菩薩が変化した「大の法師」が一人で戦い、岸和田を守護する、地蔵菩薩利益譚となっている。

一ころ根来雑賀の者ども一黨して、この城をせめんとおしよせ、稲麻竹葦のごとくうちかこみ、鯨波やまをうごかし、戈鋌日にか、やきて、敵（てき）みかたたがひに骨をくだくところに何ともなく大の法師一人、忽然とあらはれいで、鐵棒をもつてさんぐにた、かへり、寄手これをおつとりこめて、大刀長刀にてわたりあひ、我うちとらんとひしめけども、蝶鳥などのごとくに手にもとまらず、さんぐにおいちらさる、敵又はせあつまりてうちよすれば、又この法師いづくともなくあらはれ出て、千変万化、神力自在に見えければ、寄手もふしぎの思をなし、今ははや賈あぐみければ、をのく一まづ引とらんと評定するに、中にも又す、み出て申けるは、このごろ度くの合戦、白昼

によすればこそ、かゝる法師にふせがれぬ、いざや暗夜にしのびよりて、一夜討して見んといひければ、此議もつともなりと同じて、或夜しのびに城ちかくおしよせて、鯢をどつとつくりけるに、城中周章、弓よやりよとひしめきて上を下へとかへしけるうちに、それとはなく城中におなしく鯨波をあはするこゑ、いかづちなどのごとくにして、又櫓より手くに百子の松明をなげ出し、弓箭兵杖を帶せし武者、いく重ともなく立かさなりて、雨のふることくに矢をいかければ、寄手案に相違して、かゝる大勢のこもりて、しかもかくきびしくふせがんにおゐては、身方いかでか勝利をうべきといふ程こそありけれ、我さきにと引しりぞきて、とかく此城資落ん事はかなふまじとて、をのく本所へかへりける、かくて城内にはおもひもよらぬ軍にうちかちぬる事、これたゞ事にあらず、(傍線は筆者加筆。)

一方、「和泉名所図会」では、次のように記されている。

天正年中、松浦氏、此城に籠られし時、紀州根来雑賀の逆徒、近隣を侵し、既に岸和田の城を陥さんとす。かゝる時

に、城中にひとり大法師あり。劔術妙手を震ひ、蝶鳥の如く戦ひければ、逆賊、大い恐れ、四度路になつてぞ敗走す。大法師、敵を追ちらし、忽然として見へず。人みな、奇也とす。軍散じて後、城主、時々、蛸の堀に浮むを見る。(傍線は筆者加筆。)

地藏菩薩が岸和田を守るべく戦つたという利益譚の後に、蛸が堀に浮かび、堀をさらうと地藏菩薩を発見したという、蛸が地藏菩薩とともに戦つたことを暗示させる展開になっているのである。なお、それを「蛸地藏縁起絵巻」はふまえて、

法師を討取んとする時に、こゝに海辺俄に鳴動し、数千の蛸集り会て、口より黒き物の毒気を吹かけしか

と、蛸が参戦する様子を具体的に描いたものと考えられる。蛸の存在に注目して描いていることから、ここには合戦当時の岸和田城主の信仰にこたえるべく戦うという、「利益集」のような地藏菩薩利益を表す文脈ではなくなっていることが指摘できる。

次に、「利益集」のみにみられる場面に注目し、縁起絵巻制作の意図を考察したい。

「利益集」では、小出大和守が城主である時、合戦の目的を「羽柴秀吉のため」と述べ、その後、松平周防守が城主の時に「池の尻」というところに安置した地藏菩薩が朽ち果ててしまつたと述べている。

その、ち松平周防守在城の時、いさ、かゆへありて、この地藏堂を近村池の尻といふところにうつさる、かくて星霜としふりて靈像もや、くちそんじさせ給ひ、堂宇も破壊になん／＼とす

「蛸地藏縁起絵巻」には、この二点の記述はない。また、「蛸地藏縁起絵巻」にのみ、「小出播磨守」在城の時、地藏菩薩が「白法師と変現していて、往来の男女頻りに恐れを作す」という、地藏菩薩の利益譚から外れる展開がある。

以上のことから「蛸地藏縁起絵巻」には、中村一氏、小出播磨守、小出大和守という、羽柴秀吉の縁者を地藏菩薩の利益から排除し、さらには、徳川方の松平周防守による地藏菩薩を城外へ放逐した記述も排除していることがわかる。特に、地藏菩薩が城外で悪戯をした時期が秀吉の縁者・小出播磨守であったとする展開は意図的であり、徳川幕府に対する政治的配慮をも

うかがわせるのである。

八 まとめ

「蛸地藏縁起絵巻」の成立時期は、「和泉名所図会」刊行の寛政八（一七九六）年以降であり、改装が行われた安政四（一八五七）年以前と考える。「蛸地藏縁起絵巻」には、地藏菩薩の生譚を語るのみならず、徳川幕府に対して配慮しつつも、岸和田城史を伝えるべく制作された意図が読み取れる。

また、天性寺については、岸和田市立図書館蔵「地藏万人講会募縁序」に「天保三年閏十一月」に「火災にかゝりて御堂をはじめ庫裡書院まで一時の烟とのほれり」と伝えられている。この火災により全焼に近い状態であったのである。ただし、境内に置かれた灯笼と水鉢には、天保四（一八三三）年に寄進されたことが記されている。火災後に復興された寺院であることを裏付けている。「蛸地藏縁起絵巻」の作成についても、火災以降に、「和泉名所図会」など参考しつつ、縁起絵巻が制作されたのではないかと推考する。

災害という観点から考察すれば、岸和田市の過去に起きた自然災害に関する史料をまとめた「岸和田市災害史料集」¹⁵⁾に、建

武年間に暴風や高波が岸和田を襲ったとする記事は、「蛸地藏縁起絵巻」以外にみられない。しかし、和泉国・河内国では、七〇六年以降多数の自然災害にみまわれていることが報告されている。中でも江戸時代の岸和田は、大雨・暴風・地震の被害が多く、元和五（一六一九）年には、小出氏にかわって岸和田藩主となった松平康重が岸和田城の海側の防備と、防潮堤をかねて、本町の光明寺から堺町の外堀まで、約七〇〇メートルに及ぶ石垣を築いている。¹⁶この石垣の一部は現在も残っており、岸和田市指定文化財となっている。

この状況から鑑みて、海辺である岸和田に居住する人々にとって、暴風と高波から城下を守ったとする地藏菩薩利益譚は、合戦のない平和な時代に生きる人々であるからこそ、命に関わる事項であり、この地藏菩薩を信仰する所以となったものと推量できる。

「蛸地藏縁起絵巻」と「利益集」の本文の異同が多い点からも、「利益集」が依拠した、天性寺建立当初の「蛸地藏縁起」の存在が考えられる。建立当初の「蛸地藏縁起」が、書承・口承によって、「蛸地藏」伝承が変化を遂げ、地藏菩薩の利益譚としてだけでなく、「蛸地藏」に救済されることを約束された岸和田城下、さらには岸和田城の歴史をも含んだ「蛸地藏縁起絵巻」

が制作されたことが考えられる。この岸和田藩の繁栄を象徴すべく制作されたこの「蛸地藏縁起絵巻」一巻の制作費用を鑑みれば、天性寺の寄進だけでは難しく、文化政策を進めた藩主が関与したことをも想起できる。岸和田藩の政策と、縁起の制作に関する問題を含めて今後の課題としたい。

【注】

- (1) 『国文学』九八号（関西大学国文学会、二〇一四年三月）
- (2) 大澤研一・仁木宏編『岸和田古城から城下町へ 中世・近世の岸和田』（和泉書院 二〇〇八年）
- (3) 注(2)に同じ。
- (4) 注(2)に同じ。
- (5) 塙保己一編『群書系図部』第一（続群書類従完成会、一九八五年）
- (6) 岸和田市教育委員会編『岸和田城と岡部家』（岸和田市教育委員会、二〇一一年）
- (7) 岸和田市史編さん委員会編『岸和田市、一九九六年』
- (8) 注(6)に同じ。
- (9) 岸和田市立郷土資料館、二〇〇四年
- (10) 注(6)に同じ。

(11) 六種のうち、(2)「延命地藏菩薩經直談鈔」以外は、注(1)に全文を掲載している。(2)については、複製版として、渡浩一編「延命地藏菩薩經直談鈔」(勉誠社、一九八五年)がある。

(12) 「仏教民俗研究」(第六号、仏教民族研究会、一九八九年九月)

(13) 「市大日本史」(八号、大阪市立大学日本史学会、二〇〇五年五月)

(14) 井上智勝、高埜利彦編「近世の宗教と社会2」(吉川弘文館、二〇〇八年)所収

(15) 岸和田市教育委員会、二〇一二年三月。

(16) 注(6)に同じ。

(付記)

小稿は、関西大学国文学会(二〇一三年二月一日)於・
関西大学)における口頭発表に基づいて成稿したものである。

(つじ) ようじ／本学大学院生)